

きれいに暮らす

奈良県スタイルジャーナル

VOL.

18

2021 DECEMBER

循環型の生活スタイルの
普及を目指して





「リサイクルステーション」での積み出し作業

地球の宝を守り隊



地球の宝を守り隊 代表
仲尾京子さん



地球の宝を守り隊 副代表
岡崎典子さん

幅広い環境活動を通して 「子どもたちの未来」を守る

地元の保育所に通う園児のお母さんが集まって結成された「地球の宝を守り隊」。
リサイクルや清掃活動、幅広い世代を対象にしたエコ講座、子どもたちの農業体験など、
さまざまな角度から環境活動の意義や楽しさを伝えています。

子育て中のお母さんたちが結成
自分たちに行えることを地道に

この会が結成されたのは、代表を務める仲尾京子さんが30代の頃、県内で開かれた環境講演会に参加したことがきっかけ。「『ごみは素敵な魔法使い』というテーマで、ごみを活用すれば、地域が潤い、未来につけを残さない暮らしができるという内容でした。その話にすごく感動しました」。当時の室生村は、ごみ集積所に常時可燃ごみ、不燃ごみが分別されることなく、山のように積んでありました。「地域のごみ問題を放置しておく、子どもたちに悪い影響を及ぼしてしまうという危機感があり、講演会の話に刺激を受けて、自分ができることからやってみようと思いました」。同じ保育所に子どもを預けるお母さん8名が集まり、週に1回のごみ拾いから活動をスタート。結成から約30年経過した今もその活動は続き、現在は年に5回程度、地域の清掃活動を行っています。

ごみ拾いと並行して始めたのが、リサイクル活動。地区内の数カ所にアルミ缶ボックスを設置し、一杯になると、各自が車で廃品回収業者まで持ち込んでいました。

活動開始から2年後、環境問題に熱心な地元企業が倉庫を貸してくれたことで、新聞紙・雑誌・段ボール・アルミ



右：国道沿いで行う清掃活動では毎回多くの缶を収集
左：小学生向けに開催した「ミニエコ講座」



缶などをいつでも持ち込める「リサイクルステーション」という新たな拠点を設けました。年に3〜4回、積み出しを行い、平均約4トンの資源ごみが集まっています。

エコ講座、放課後子ども教室など 活動の場が広がる！

「ごみを少なくするために、リサイクル活動を始めましたが、時代は徐々に変わり、地球温暖化やダイオキシンなどの問題が出てきて、地域の方々に環境についてもっと学んでほしいと思うようになりました」。仲尾さんは奈良県の研修を受講し、県から「ストッブ温暖化推進員」に委嘱され、宇陀市内の各地で「ミニエコ講座」を開催。幅広い世代を対象に、長年リサイクルの意義やものづくりの楽しさを伝えていきます。

同時に、県内のNPO法人の勧めで、「放課後子ども教室」もスタート。「みんなで宿題をして、その後、畑に行ったり、工作したり、親御さんが迎えに来るまで、一緒に時間を過ごしました」。子どもたちの人数が増えたことで、対応するメンバーが不足し、終了せざるを得ない状況に。しかし、そ



の後、メンバーが所有する田んぼの一部を使って、小学校の課外授業として農業体験を行うなど、環境への意識を地域に根付かせる活動を地道に続けています。

また、不要なものを必要な人へ橋渡しする「フリーマーケット」も継続して開催してきました。現在は、仲尾さんが理事長を務めるNPO法人「うだ夢創の里」の拠点の一室を、いつでも持ち込み、購入可能な「フリーマーケットスペース」に。貴重なリサイクル活動の場所になるだけでなく、住民の憩いの場としても親しまれています。

何事にもまずチャレンジ！ 地域の素晴らしさを伝えたい

仲尾さんに約30年活動を続けられた秘訣を聞くと「自分たちが楽しみなから、できることをやってきたという感覚。そして、心が知れた仲間と一緒にいろいろな活動をするのが楽しいんです」と笑顔。取材日に行われた、資源ごみの倉庫の積み出し作業も、笑い声が絶えないほど明るい雰囲気の中で行われていました。副代表の岡崎典子さんは「大変なことも多いですが、みんなで『しんどかったな』と言い合う

のが楽しいです。そして、何事もまず挑戦してみようという前向きなメンバーが集まっているので、さまざまなアイデアを実行することができました」と話します。

「地球の宝を守り隊」という名前について、「『宝』には二つの意味が込められています。活動のきっかけとなった講演会で学んだ『ごみは宝』という意味と、『地域の子どもたちは宝』という意味。今までの経験やつながりを生かした環境活動を通して、地域の若い世代や子どもたちに、この地域の素晴らしさを知ってほしい」と仲尾さん。

英語や手話、民謡、三味線など、さまざまな資格や特技を持つメンバーが多く、各自が開く教室やワークショップがきっかけで、「地球の宝を守り隊」の活動に興味を持ってくれる方々もいるとのこと。チャレンジ精神があり、大変な活動の中にも楽しさを見出せるメンバーの活躍の場はこれからも広がっていくはずだ。





2号機の「木製水車」の動作確認を行う中西さん

明日の野を 創ろう会



中西 巖さん
いわお

明日の野を創ろう会 会長

村の歴史文化を活用した 「水車づくり」で地域活性化

災害に備えた発電設備として製作された二つの「水車」。
計画から稼働に至るまで、多くの人々が関わり、今や村のシンボルの一つに。
その周辺を整備してつくった広場は、新たな憩いの場となっています。

メインの活動として進めてきたのが、停電時の照明の電源を確保することを主な目的とした「水車づくり」。的野地区は、古くから精米や豆腐づくりなどに多くの水車を利用された歴史がありました。その事実に加えて、中西さんを突き動かしたのが、ボランティアとして訪れた「東日本大震災の被災地」での経験でした。「その地域はオール電化を進めており、あらゆる生活面でパニック状態に陥っていました。そ

その思いを持ち、区総会で承認を受け、9名で活動をスタートさせました。

「明日の野を創ろう会」です。

結成されたのは平成26年(2014年)。当時自治会長を務めていた中西巖さんは、高齢化と村内人口の減少、価値観の多様化によって、村の伝統の維持・継承が難しくなっている状況に危機感を抱いていました。「これからすべての世代が協力し、豊かな地域社会を創っていかねばいけない」。その思いを持ち、区総会で承認を受け、9名で活動をスタートさせました。

全面積のうち約80%が山林で、木津川に沿って集落と農地が点在し、農業を主産業として発展してきた山添村。その集落の一つ、的野地区で、「農村や田舎の良さや価値を再認識し、それを生かした村の活性化」を目的にして結成された団体があります。それが

地元の価値を生かした活動
被災地での経験が原動力の一つ



れを目の当たりにして、私たちの故郷でも同じ事態になることを想定すべきだと感じました。そして、一晩でも照明等の電源が確保できれば、住民の助



2号機製作時の様子

けになるし、村の安全・安心につながるのではないかと考えました」。

環境への負荷が少ない自然再生エネルギー活用の一つとして、「ホイール型小型水車」の製作と蓄電に取りかかりました。吉野小水力利用推進協議会の全面的な協力のもと、材料調達や加工、実験などは奈良工業高等学校の教員・生徒の力も借り、約1年がかりで完成。修理を経ながら、現在も夜間用外灯の電力源として稼働しています。

地域住民が協同して つくりあげた「木製水車」

1号機の水車の完成から間もなく、2号機となる「直径2mの木製水車」の製作の検討を始めました。奈良県再生エネルギー導入アドバイザー等のアドバイザーを基に、メンバーがオリジナルの設計図を作成。木製部分は、村内の製材所から購入した地元産の杉を使い、メンバーだけでは難しい細やかな

加工作業は、長年木工業を営んできた地域の方に協力を依頼。また、水車の心臓部ともいえるシャフトや滑車部分の製作は村内の鉄工所に制作を依頼するなど、村内の専門家と協同で水車づくりの計画を進めました。水路

整備や落下防止柵の設置なども行い、数々の苦労の上、稼働に至りました。その後、発電回路も整備し、電力は水車のライトアップなどに使われています。

「多くの方々の協力のおかげで、完成まで辿り着いたので、水車が動き始めた瞬間は、感動的でした。水量の調整も難しく、うまく稼働するのに時間はかかりましたが、現在の形に落ち着いてからは、ほぼ止まったことはありません」。水車について話す時の中西さんの目は輝いています。

さまざまな人々との交流が楽しみ！ 暮らしを支える環境を守り続ける

中西さんが活動をするうえで大切にしてきたのは「無理をしないこと」と「環境に負荷をかけないこと」。「水車に着目したのは、この村にそれを使ってきた歴史文化があり、水が豊富な土地柄をうまく活用したかったから。メ

ンバー一人ひとりの負担を含めて、さまざまな面で無理をしないということに気をつけてきました」。

水車が完成した際には、県内の大学生が見学に訪れるなど、水車づくりの活動をきっかけに、村内外の人々との交流する機会が増えています。さらに憩いの場・交流の場をつくるために水車周辺の整備にも着手。2号機近くにつくった広場は「ぼんそこたん」と名付けました。長く自然と共生してきたアイヌ民族の言葉で、「小さな滝のある村」という意味だそうです。

現在は3号機の製作も検討中。「里山の暮らしは、清らかな水、新鮮な空気、それを育む山や森の恵みで成り立っています。人々の暮らしを支えてきたこの環境を維持・整備していきたい」と中西さん。地域の財産を活用した「明日の野を創ろう会」の活動には、これからのまちづくりや環境活動の参考になる要素が凝縮されていました。





部署の垣根を越えて環境活動を推進。(後方は奈良市内循環線のハイブリッドバス)

奈良交通株式会社



自動車事業本部 安全管理部
車両グループ 統括課長
中村 安伸さん



経営戦略室 経営企画グループ
課長
名迫 義仁さん



総務人事部 人事労務グループ
人事・教育担当
米田 桃子さん



総務人事部 総務広報グループ
黒田 浩成さん



総務人事部 総務広報グループ
大川 真由子さん

全社をあげた環境問題への取組は 地域社会だけでなく社内にも好影響を与える

アイドリングストップをはじめとする「エコドライブ」の推進や、
環境に関する認証制度に向けた取組、クリーンアップチームを結成して行う「清掃活動」など、
環境問題への取組を積極的に行っています。

「エコドライブ」を推進！
環境に対する意識向上に取り組み

いちはやく

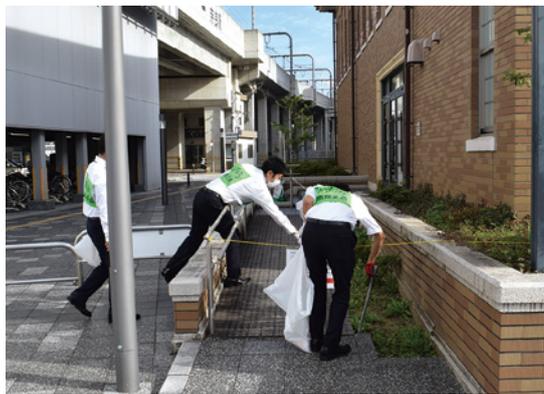
関西の大手バス会社として、乗合、観光事業を中心に、地域に密着した事業を展開する「奈良交通株式会社」。「事業活動を通じて社会の発展に貢献し、あわせて社員の幸福を追求する」という経営理念のもと、積極的に進めているのが、環境問題への取組です。

全社をあげて「エコドライブ」を推進する取組を行っており、「停留所や信号待ちなどで停車した際はアイドリングストップを心がけ、急発進・急加速・急ブレーキは避けながら、定速走行に努めています。燃費向上の面で一定の効果があり、CO₂の排出量の削減にもつながるので、エコドライブは継続して取り組んでいます」と話すのは、安全管理部統括課長の中村安伸さん。「取組の開始当初は、アイドリングストップが世間に浸透しておらず、その都度エンジンが止まることに対して、お客様からご指摘を頂くこともありました」。それを受けて、車内に「エコドライブ推進中」や「空調の面で不自由おかけします」といった文言のポスターを貼るなどの対策を行い、お客様への周知に努めてきました。また、月ごとの燃費を社内の掲示板に貼り出し、昨年の数字と比較できる機会をつ



環境に関する各種認証を取得 会社の取組が時代にマッチ!

くることで、ドライバーのエコドライブの意識向上につながる取組も行っています。平成7年度から、アイドリングストップバスを導入し、現在では全体の8割を占めています。また、平成26年度からは奈良市内循環線でハイブリッドバスを、平成30年度には環境省の支援もあり、けいはんな学研都市で連節バスを導入しました。



クリーンアップ活動の様子

また、営業所の一部は、「グリーン経営認証」を取得しています。「グリーン経営認証」は、企業の環境保全活動への取組意欲を向上させ、運輸業界における環境負荷の低減につなげることを目的として創設された制度です。国土交通省所管の「交通エコロジ・モビリティ財団」が認証機関となり、エコドライブや環境に配慮した点検・整備の実施など、一定のレベル以上の取組を行っている事業者に対して、審査のうえ認証登録を行っています。有効期間が2年で、更新のたびに行う「認証取得への取組」も社員の環境問題への意識向上につながっています。

進している事業所、自治体を優良事業所として認証する制度です。総務人事部の米田桃子さんは、「本社は公共交通機関での出勤を原則としており、社員の車通勤を認めていません。環境問題に対する会社の理念がこの制度とマッチしたため、申請させていただきました」と話します。地域社会の発展に寄与する取組を進めてきた成果がさまざまな形で評価されています。

多くの気つきがある「清掃活動」 今後も時代に応じた取組を進める

環境問題の取組として、地域の清掃活動にも力を入れています。平成13年度に「クリーンアップチーム」を結成。本社社員に募集し、役職を問わず約70名が集まりました。当時、毎月第一土曜日は半日出勤のため、その午後から約2時間、2班に分かれ、路線バス沿線を中心に清掃活動を行っていました。現在は、奈良県が毎年9月に実施している「クリーンアップならキャンペーン」に積極的に参加。「主に社内業務を担当する社員は、実際にバス沿線を歩くことで初めて知る情報もありまし、地域の皆様に支えていただいていることを実感できる良い機会になっ

ています」と、総務人事部統括課長の黒田浩成さんはこの活動に意義を感じています。広報担当の大川真由子さんは、「普段の業務で関わるのが少ない社員と交流でき、コミュニケーションを図れる場にもなっています」と話し、社内にもさまざまな面で良い影響が出ています。

「全社的には節電にも努めており、夏と冬の空調は設定温度を抑えています。また、弊社が運営する自動車教習所の屋上や一部営業所施設の屋根には太陽光パネルを設置し、その電力を売電しています。これからも、時代に応じた取組を進めていきたい」と話すのは、経営戦略室課長の名迫義仁さん。「奈良交通株式会社」の環境問題への取組は、これからも地域の良いお手本として注目を集めていきそうです。



アイドリングバス等環境に優しいバスを保有し、事務所棟の屋根には太陽光パネルを設置

「まほろばエコスタイル ~Winter~」を実施しています。

実施期間

令和3年12月1日 ▶▶▶ 令和4年3月31日



奈良県エコキャラクター
「な～らちゃん」

奈良県では脱炭素社会の構築に向け、市町村、事業所と連携し、省エネ・節電に取り組めます。

Ⅰ 適正暖房 室温20℃

暖房の効率を上げる

日中は太陽の熱を取り入れ、
夜はカーテン、
ブラインドを活用



重ね着で体温調節

保温性の高い
衣類を活用、
ひざかけの利用など



Ⅰ 自主的な省エネの 取り組み

階段を利用

エレベーターの
利用を控える



こまめな消灯

不要な時は消灯



3密の回避、手洗い・手指消毒、咳エチケットの徹底、定期的な換気など、「新しい生活様式」を意識しながら実践しましょう。

「なら四季彩の庭」インスタグラムはじめました！



奈良県内の花や緑による美しい景観を皆さんと共有すると共に、より多くの方がこの「庭づくり」に取り組んでくださることを目的に、「なら四季彩の庭」公式インスタグラムを立ち上げました。この「庭づくり」は、どなたでも参加できます。

ぜひ、皆さんが見つけた花と緑による県内の美しい景観や、皆さん自身が取り組まれた「庭づくり」を『#なら四季彩の庭』で発信してください。共に、訪れる人が感動し、住む人が誇れる奈良県を目指し、「庭づくり」を楽しみましょう。

アカウント名

nara_shiki_irodori



『#なら四季彩の庭』づくりのルールは5つです

- 奈良県内の、自身が所有・管理する場所、もしくは所有者・管理者の許可を得た場所に花を植えましょう。
- 敷地に立ち入ることなく、誰でも見ることができる場所に花を植えましょう。
- 管理も大切な「庭づくり」です。大切に育て、適切に管理しましょう。
- 特定外来生物に指定されている植物は植えないようにしましょう。
- 県全体で一つの庭となることを目指し、「なら四季彩の庭」づくりを楽しみましょう。



「なら四季彩の庭」公式HP ▶▶▶



きれいに暮らす

奈良県スタイルジャーナル 第18号

2021年12月発行

発行 / 奈良県 水循環・森林・景観環境部 環境政策課

〒630-8501 奈良市登大路町 30

TEL.0742-27-8732 FAX.0742-22-1668